



の中の

子どもたち

第21回 きみはいい子

— 供養の映画 —

川崎 二三彦

ある子ども

性懲りもなくというべきか、仕事柄というべきか、児童虐待が扱われているらしいと聞かされ、気がつく足が自然に映画館に向かっていった。だからこういう映画は、座席シートに座ってもあまりわくわく感がない。むしろ、いささか食傷気味というのが偽らざるところだ。

が、上映開始しばらくして、俄然目が覚めてきた。いくつかの物語が絡み合うオムニバス映画の一コマ。雨の中、小学校の校庭で雨宿りしている子どもを見つけて、担任が声をかけるシーンだ。

「まだ帰ってないのかい？」

「お父さんが、5時までは帰ってくるなというから……」

様子が変わってくるのはこのあたりからだ。「あれ、この子、私の知^{いぶか}っている子とよく似ているな」と訝りながら、次の展開に目を凝らしていると、担任が「家まで送っていくよ」と声をかける。なぜかためらう子どもを説得して自宅にたどり着くと、玄関先にいた男が気づいて子どもを問い詰める。

「誰？ こいつ」

「先生」

「私、担任の岡野です」

「おまえ、なんかしたの？」

「……」

「あっ、いえ、雨だったもので、私が送ってあげようと言ったんです」

こんなやりとりの後、担任が、「5時にならないと帰ってはいけないとのことですが……」と言いかけた途端、男は「うるせー」と怒鳴って子どもを連れ、家の中に入ってしまう。

ここまで何気なく見ていたのだが、はっと気づくと、視点が180度転回していた。すなわち、この子は映画の中で純粹に造り上げられた架空の人物ではなく、私が知っている実在の子ども

をモデルに形象化されたのではないかということだ。

とはいえ、たまたま見た映画でそんなことが起こり得るものだろうか。半信半疑で続きを見ていたら……。

「おまえ、あいつに何言った？」

外に佇む教師には、こんな声とともに、家の中からどすんどすんという鈍い音が聞こえてくる。だからといってドアをノックすることもできず、担任はそのまま引き返す。



これで私は確信した。全く同じなのである。いくらなんでもここまで一致するはずがない、と思ってこの映画の原作小説を探して読んでみると、小説の作者・中脇初枝の出身地が、私の知っている子どもとその家族が住む地と重なっている。

この子は本当は……

これで映画の見方が変わってしまった。映画のストーリーと実在していた子どもの経過を比べながら、固唾をのんで見入ったのである。

では、私の知る子どもは、どのような子どもで、どんな事例だったのか。先にその点について述べておこう。

やはり小学生の彼は、映画と同じく実母と内縁男性と3人で生活していたが、映画と同様「5時まで帰ってくるな」と言われていた。

「おまえは友だちが少ないから、5時までは友だちと遊んで来い」

こう言われて、彼は雨の日も風の日も、夏休みも土曜や日曜も学校の校庭で過ごし、お腹をすかせ、教師にラーメンを食べさせてもらう。



そしてある日、やはり雨の中にいる彼を見かねた教師が付き添い、家まで送って行くのである。

男性は無職で一日中ゲームなどで過ごしていたのだが、子どもが家の中に入った途端、「遊んでこいと言っただけで、帰るなど言っていない。おまえは教師に嘘ついた」と激昂し、子どもを持ち上げて畳に落としてしまう。

教師がどすんどすんという音を聞くところも映画と寸分違わないが、実在の子どもは、この後さらに責められ、1か月もしないうちに、虐待によって死亡するのである。

時計

私がなぜこの子どもを知っているのかということ、この事例について、当該自治体が行った死亡事例検証委員会に委員として参加し、詳細な検討を行ったからである。

それはさておき、幸いにしてというべきかどうか、フィクションである映画では、希望の灯が仄見える結末となっている。

というのも、当の子どもがいつも佇んでいた校庭で、担任教師がふと見上げると、視線の先には校舎に備え付けられた時計があり、担任は、そのとき初めて気づくのである。

「そうだったんだ。あの子はいつもこの時計を見て、帰宅できる時刻を計っていたんだ」

実際の事例では、彼の死後、やはり教師が校庭のその場所に立ち、子どもと同じ目線で時計を見上げ、彼を救えなかったことを悔やむのだが、映画では、時計を見た担任が、息せき切って彼の家まで走り続け、やがて歩を緩め、玄関先に到達すると大きく深呼吸し、力強くドアをノックする。映画はここでエンディングを迎えるのである。

現実とフィクションと

ただし、映画を見終わった私には複雑な思いが残った。なぜとって、映画の中の子どもは、もはや私の目には、フィクションではなく死亡した実在の子どもにしか見えなくなっていたからだ。

死亡事例の検証では、亡くなった子どもの命を無駄にしないため、そこから何を学ぶかが問われていたが、映画は、(私に言わせれば)過去に遡って子どもを死の淵から救い出し、生かすことで希望を語ろうとしているように思える。つまり、ラストシーンは、生前の彼が、今を生きる私たちに託した未来の姿として描かれたものではなかったのだろうか。

現実とフィクションとはもちろん違うのだけれど、両者が混然一体となってしまった私には、この映画が、亡くなった彼を供養する作品に思えてならないのであった。

* 2015 / 日本

* 鑑賞データ 2015/07/21 京都シネマ

* 公式 HP <http://www.iiko-movie.com/>

* Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/38297>

第1回	プレシャス	* 題名を click すると本文へ ジャンプします。
第2回	クロッシング	
第3回	冬の小鳥	
第4回	その街のこども	
第5回	八日目の蟬	
第6回	いのちの子ども	
第7回	ラビット・ホール	
第8回	サラの鍵	
第9回	少年と自転車	
第10回	オレンジと太陽	
第11回	孤独なツバメたち	
第12回	明日の空の向こうに	
第13回	旅立ちの島唄	
第14回	くちづけ	
第15回	もうひとりの息子	
第16回	メイジーの瞳	
第17回	ファイ	
第18回	思い出のマーニー	
第19回	ショートターム	
第20回	真夜中のゆりかご	